



Music Dialogue ディスカバリー・シリーズ Vol.1
2019年5月24日(金) 19:00開演(18:30開場)

プログラム

◆L.v.ベートーヴェン(1770-1827) : **ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.16**

L.v. Beethoven: Piano Quartet in E flat major Op.16

第1楽章 Grave - Allegro, ma non troppo

第2楽章 Andante cantabile

第3楽章 Allegro, ma non troppo

江崎萌子(ピアノ)、伊東真奈(ヴァイオリン)、大山平一郎(ヴィオラ)、加藤文枝(チェロ)

休憩

◆J.ブラームス(1833-1897) : **ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 Op.25**

J. Brahms: Piano Quartet No. 1 in G minor, Op. 25

第1楽章 Allegro

第2楽章 Intermezzo: Allegro ma non troppo - Animato

第3楽章 Andante con moto

第4楽章 Rondo alla Zingarese: Presto

江崎萌子(ピアノ)、伊東真奈(ヴァイオリン)、大山平一郎(ヴィオラ)、加藤文枝(チェロ)

お客様とのダイアログ

[共催] 一般社団法人 Music Dialogue、サポート ミュージック ソサエティ

[協力] 日本音楽財団(日本財団助成事業)

[認定] 公益社団法人 企業メセナ協議会





演奏者プロフィール



江崎萌子 Moeko Ezaki [ピアノ]

桐朋女子高等学校音楽科首席卒業後、パリスコラ・カントルム音楽院、パリ国立高等音楽院にてテオドール・パラスキヴェスコ、フランク・ブラレイ、上田晴子の各氏に師事し、修士課程卒業。現在ライブツヒ・メンデルスゾーン演劇音楽大学演奏家課程にてゲラルド・ファウト氏に師事する。またイヴリー・ギトリス、メナヘム・プレスラー、マリア・ジョアン・ピレシュ各氏の薫陶を受ける。Music Dialogue アーティスト、CHANEL Pygmalion Days 2018 アーティスト。第 58 回全日本学生音楽コンクール東京大会第 2 位、第 2 回桐朋ピアノ・コンペティション第 1 位、第 4 回東京ピアノコンクール一般部門第 2 位、第 80 回日本音楽コンクールピアノ部門入選。2017 年第 26 回エピナル国際ピアノコンクール（フランス）第 4 位、併せてオーケストラ賞、現代曲賞を受賞。パリフィルハーモニー大ホールにてパリ管弦楽団プレリユードコンサートのソリストを務めたのをはじめ、これまでに日本、フランス、ベルギー、ドイツ、オーストリア、イタリア、パキスタンにて演奏する。



伊東 真奈 Mana Ito [ヴァイオリン]

奈良県出身。東京藝術大学音楽学部を経て、同大学院修士課程修了。院在学中にパリのスコラ・カントルム音楽院に 2 年留学、ディプロム取得。京都芸術祭毎日新聞社賞受賞。松方ホール音楽奨励賞受賞。大学卒業時に同声会賞受賞。リゾナーレ室内楽セミナーにて「緑の風賞」受賞。JT が育てるアンサンブルシリーズ、六花亭コンサート、ムジークフェストなら等に出演。Music Dialogue アーティスト。これまでに、高木和弘、小栗まち絵、澤和樹、森悠子、G・プーレ、J・P・ヴァレーズ、安紀ソリエール、玉井菜採の各氏に師事。



大山 平一郎 Heiichiro Ohyama [ヴィオラ]

米国サンタバーバラ室内管弦楽団・音楽監督兼常任指揮者、シャネル・ピグマリオン・デイズ・室内楽シリーズ アーティストック・ディレクター、Music Dialogue 代表。英国のギルドホール音楽学校を卒業。1979 年にジュリーニ率いるロスアンゼルス交響楽団の首席ヴィオラ奏者に任命され、1987 年にプレヴィンから同楽団の副指揮者に任命される。九州交響楽団の常任指揮者、大阪交響楽団の音楽顧問・首席指揮者等を歴任。室内楽の分野では、サンタフェ室内楽音楽祭やラホイヤ・サマーフェスト、ながさき音楽祭などで芸術監督をつとめた。2003 年に 30 年にわたるカリフォルニア大学教授職を終える。2005 年に“福岡市文化賞”、2008 年に文化庁“芸術祭優秀賞”、2014 年にサンタバーバラ市の“文化功労賞”を受賞。



加藤 文枝 Fumie Kato [チェロ]

京都市出身。2006年パリエコールノルマル音楽院に給付生として留学。2010年東京芸術大学音楽学部器楽科チェロ専攻卒業。学内にて、安宅賞、アカンサス賞、三菱地所賞受賞。2010・2011年サントリーホール室内楽アカデミー第1期生。2014年東京芸術大学大学院修士課程修了、アカンサス音楽賞受賞。パリ市立音楽院を満場一致の首席で卒業。第8回ビバホールチェロコンクール第1位。第7・8回東京音楽コンクール弦楽部門第2位。FLAME国際コンクール第3位。平成23年度京都市芸術文化特別奨励者。これまでに、故 杉山 實、ドナルド・リッチャー、アラン・ムニエ、河野文昭、ラファエル・ピドゥの各氏に師事。また、室内楽を岡山潔、松原勝也、P.ルコール、E.ルサージュ、P.メイエの各氏に師事。財団法人地域創造による公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト。Music Dialogue アーティスト。

山岸園子 Sonoko Yamagishi [司会]

聖心女子大学文学部歴史社会学科卒業。グロービス経営大学院（MBA）修了。株式会社リンクアンドモチベーションにて、人材育成や組織風土改革に関する業務に従事。若年層向け教育サービスを提供する新会社立ち上げを担当した。その後株式会社グロービスに入社し、現在は経営大学院／グロービス・マネジメント・スクールにて、マーケティング・学生募集部門の戦略立案やチームマネジメントを担当している。12歳からヴァイオリンを始め、現在もアマチュアオーケストラなどで演奏している。

ディスカバリー・シリーズの開催にあたり、こちらの団体・個人様よりご支援頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

日本音楽財団様、三尾 徹様、匿名希望 2 名様（順不同）

演奏作品について

L.v.ベートーヴェン (1770-1827) : ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.16 (原曲 1796 年作曲)

本作はピアノ、オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットのために作曲された五重奏曲を、ベートーヴェン自身がピアノと弦楽三重奏のために編曲した作品です。

若きベートーヴェンは故郷ボンからウィーンに上京し、ピアノのための作品や小編成の室内楽を中心に研鑽を積みました。特に 20 歳前後には、管楽器のための室内楽「ハルモニウムジーク」を集中的に作曲しています。ハルモニウムジークは食事会などで用いられた楽曲で、BGM や娯楽音楽の一種だと考えられていました。しかしベートーヴェンは内容の薄い音楽を書くことはしませんでした。貴族から手堅く評価を得つつ、管楽器の扱いに習熟するチャンスとして活用したのです。その経験はのちに交響曲第 1 番をはじめとするオーケストラの作曲に活かされることとなります。

ベートーヴェンは編曲にあたってピアノパートには手を加えず、管楽器パートのみを弦楽器に変更しています。その際、単に音を置き換えるだけでなく、新たな旋律を追加したり、弦楽器ならではの方法でさらにサウンドを充実させたりと工夫を凝らしています。編曲は楽譜出版の際に商業的な理由で行われたものですが（様々な編成で演奏できる曲の方が売れ行きがよいからです）、こうした全ての機会を貪欲に自身の学びに変えてしまうのがベートーヴェンらしいところです。

J. ブラームス (1833-1897) : ピアノ四重奏曲 第 1 番 ト短調 Op.25 (1861 年作曲)

ブラームスは伝統を愛し、その継承者として自他共に認められた存在でした。このピアノ四重奏曲は 1859～61 年、つまり彼が 20 代後半を過ごした時期に作曲されていますが、それはドイツ音楽界で伝統と革新の衝突が目立った時期でもあります。ブラームスを筆頭とする保守派がいる一方、リストやワーグナーら「新ドイツ派」と呼ばれる進歩的な作曲家がもてはやされていました。ブラームスは仲間たちと声明文を出して対抗しますが、ブラームスがどう伝統を尊んだのかは、音楽そのものが雄弁に語っています。

このピアノ四重奏曲は J.S.バッハが活躍したバロック時代の手法を使って作曲されています。あるフレーズを主題として設定し、それを逆再生したり（逆行）、上下に鏡映しにしたり（転回）、と様々な方法で変化させます。そうして作られた変化形を組み合わせることで音楽を構成していくのです。この「対位法」と呼ばれる手法が徹底的に用いられているのが本作の特徴です。第 1 楽章の冒頭でピアノが提示し、弦楽器が引き継いでいくフレーズがすべての元になる主題です。

なお、対位法は後の 20 世紀に再び注目され、「十二音技法」として新たな命を吹き込まれます。その開発者である A. シェーンベルク (1874-1951) はこのピアノ四重奏曲第 1 番をオーケストラ用に編曲しています。ブラームス同様「伝統の継承者」を自認していたシェーンベルクは、その作業を通じて、バッハ、ブラームスと繋がる系譜に自身を位置づけようとしたのでしよう。

(解説 : 鉢村 優)